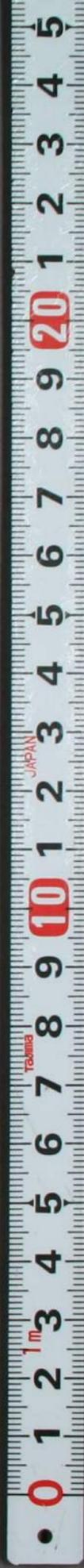


忠勇阿佐倉日記

第二編
貳



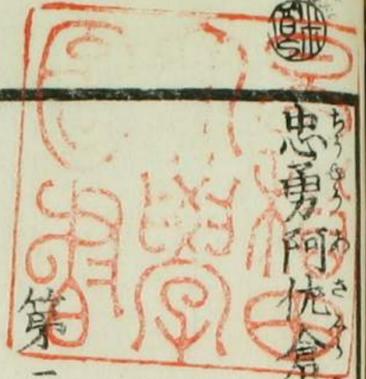
行
遠 3
AP3
7



遠 193 7 卷

忠勇阿伏倉日記第二編卷之二

明治三十二年 十月十日 購求



東都 松亭金水編次

甲賀澤正家門の榮え 正光祇園小孫女と務ふ

第三回

于粵近江の国五郡の領主甲賀澤正九衛門正光は丸馬権頭正喬の孫丸
京進正經の子なり。かく正經老年まで子なきを憂ひ願ひある。石臼の親
音人玄領とて一子と殺け。圓通丸と号け。寵愛大くあり。有は轉愛の
なりひとく。圓通丸五歳のとき又正經の穉世り。室町どの人聞えあぐ。家
跡の故より賜りしと。まご幼穉ふて度ませ。家長なる安東隼人
壯年あぐ才智賢く。内外万事を聞きて。更ふ家の風と由隨さ

可危言二編卷之二

だ。よ。幼君と補佐ありて。あふ年月と送りける。圓通九十三才ふて。
 始めて柳堂へ仕あり。元禄にて。彈正左衛門正光と号らしける。父
 祖ふ。芳らぬ賢女のこと。その容貌の清らなるを。むう。若さう。源氏の
 系。ま。在。系。の。業。平。ふ。も。立。信。言。傍。あり。て。志。と。合。め。る。美。容。の
 顔。霞。と。帯。る。細。波。津。の。梅。の。匂。ひ。も。か。や。あ。ん。と。あ。ふ。身。り。の。美。少。年。ふ。
 在。ふ。け。ま。の。室。町。殿。へ。不。と。く。あ。ま。と。愛。さ。せ。ら。ひ。元。末。甲。斐。の。勇。り
 ける。波。の。小。路。の。鐘。と。修。理。し。あ。ふ。後。居。て。昼。夜。と。多。く。出。仕。あ。る。が。余
 ト。う。ん。が。正。元。ん。め。諸。士。の。面。々。いと。歎。び。て。修。復。と。急。が。し。大。厦。高。堂。善
 美。と。盡。し。別。ふ。小。後。と。り。ひ。日。毎。柳。堂。へ。来。ら。し。ける。ふ。光。陰。移。は。ふ
 早。く。し。て。正。光。二。十。二。才。ふ。及。び。ま。す。く。君。の。内。宮。愛。他。ふ。立。並。ぶ。方。も。な。く

次。才。の。日。升。進。滞。ら。ぬ。相。伴。鬼。の。列。ふ。加。り。も。威。勢。と。も。一。門。の。上。ふ。も。立。へ。ぎ
 景。勝。る。ま。と。び。車。馬。門。前。ふ。市。と。傲。し。て。諸。家。の。崇。敬。大。と。あ。る。ま。家。門。の。旅
 ひ。あ。ふ。ふ。玉。つ。て。お。ふ。祖。の。昇。る。が。如。く。羨。ぬ。め。の。も。な。ら。り。け。り。か。く。橋。と。送。り
 新。と。送。り。て。ま。と。六。七。年。の。日。星。霜。積。り。彈。正。左。衛。門。正。光。と。二。九。才。ふ。あ。る。世
 と。き。評。定。元。の。列。と。あ。る。遠。い。を。の。職。掌。重。う。し。て。管。領。家。の。次。席。ふ。在。り。国
 家の。政。事。と。執。行。行。へ。四。海。の。女。危。も。の。身。ふ。提。ま。り。正。光。性。質。冷。剛。ふ。し。て。
 かる。大。任。ふ。屋。ま。ま。き。人。品。あ。い。あ。う。ま。ま。と。い。ま。ま。其。年。二。十。才。ふ。元。禄。に。卓。織。も
 ま。ま。定。ま。る。其。比。天。下。静。謐。ふ。似。たり。と。り。の。も。動。も。す。れ。が。諸。士。干。戈。と。執。り
 して。忽。地。修。羅。の。街。と。あ。る。是。より。簡。賢。正。五。年。お。軍。家。政。務。不。倦。と。淨。土。ち
 の。門。主。義。尋。と。り。る。ふ。此。才。さ。る。成。り。て。還。俗。と。し。め。ね。軍。職。と。嗣。と。め。ん

とありけほど。義尋の如く後秘のあつんとてきて隨ひらる。こふ放て義政公
 たう人此う実子ありとも。襦袢よりして沙汰と做し。汝が家督違芥あり
 ト。と誓ひひりバ是とて。義尋則還俗あり。名と義視と改めらる。今
 出川殿と称せ。細川勝元執事となり。近習外様あまを保護し。義
 政公と義視公と。両所とを秘ける。あつて翌年十一月。義政公の心臺所
 藤の富子の内腹。若君出生ましくけるが。富子心不思を申。去来義
 視お軍家。堅き誓ひと立らる。おの若君を沙門とて。適
 殺けし梅子の。死れあやとて祝もやせ。沙門と做せし心臺。這も
 宗全不任まぬ。と則し名宗全不。因ここと託されま。宗全脱ふ
 勝元。我塔あま心合。義視お軍不備のそり。一人勝元威を

震りん。この若君と護えて。その身も五角の権と柄んと仔細なく願
 兼せ。こま應仁の大乱の萌とすあつたり。甲斐正光とて慮添
 けま。是等ぞ後く發祥の基とんと推量。屢君あも諫と納れ
 ま。老女の便とて。心臺所へも不可多う。度と言せと申し。お
 入のふれ色あり。あふ放て一人。心と痛めらる。竟不病汝被
 出。その翌年文正より。應仁元年の春へかけて。いと大病不及むれし
 久。お軍家の孫きりひ。典某の頭甲ことして。盛衰の訊問ひれ。おきり
 曾て諸古法へ祈誓とくけ。至らぬ限もあつし。其驗や稍く。お
 病の息りゆきま。勝と籠り勝ふて。心臺物狂り。あり
 のひし。お軍家不。おし。正光とて護身影さ

限りもあらずを思ふとければ。一時一色左京大夫義春を遣使とて。その
 程所方平快不。近づく処疲労遠く。さし遣て著し給ふ。專ら
 処の保養不あり。ゆまご出仕せざるより。憚り思ふ所もあらず。然れ
 とも開ハ若くぞ。春光和暖の時ありて。花紛顔の氣と含み。舞散ハ
 野邊不若ぞ。何方不もあま心は仕し。出て保養と做さべしと。お命と演
 けまハ。正光面目才不除。辱らさきり。清く。その懇命と謝し不
 かり。かくて近臣等もそのこと表り。將軍家の忠厚志より。斯の如きの
 命ある。不日不控浚と催さして。舞氣と晴き。夕。と勅めてゆまご
 果さ。お不正光が傍とさしぬ。壁后雀井六及。沃堀園内が進。てり
 ず。君おの上と重下ゆひて。その心許不も促ひらば。遠く却て將軍家の
 志と兼く理なり。衣の山と人立多く。晴かまとも思はさ。まが
 やう不徒行よりして。被園清水などち巡。都鄙の男女の春色不狂
 ひあま。その容と。後ありてゆあ。興いと涼く。とま。あ
 平生より。俱と減。在下等の其他不。五三人とや。俱さ。涼さ。な
 召ま。誰の君と。思ひ侍。ん。いと如何不と。勅めけ。正光
 控。極めて。心不。然ら。その准。と。做し。あ
 あ。不。於。井六と。園内の外。心利。近習の士六七人。主。於。合十人。才。是
 會。涼。立。不。面。と。覆。ひ。か。の大。番。不。あ。り。登。り。武。士。名。所。古。蹟。と。見。物。を
 せ。る。体。不。打。扮。裏。門。より。出。ま。る。出。ま。る。清。水。の。音。羽。の。流。れ。と。不
 き。清。き。流。と。ち。縁。め。連。り。る。神。社。佛。閣。か。あ。る。此。方。と。ち。巡。る。不。園。未

可成會二編 卷之二

昼餉の準備もせされば正光始りの秋なり。夕しとて井六が井の傍てより
 在下等が言ひ附る所あり。此方へ入りて。祇園の社の傍より家へ伴ひ
 来すすねば。正光は何方をどの裡より祝入る。商家か。その家
 居い。廣くして清らあり。樓も傍あり。あ一面の額と架て。大江樓と稱
 されば。まを呼ぶ不ひあふ。茶坊とやうのありあらん。いと知らず思され。と
 圖内等が案内憑て。その樓へ登つる。召仕の女子と云へて。紅の鞆靴
 あり。風俗更月訓ねど。嬌焼あると傍へ。仕ふ申老侍女あどふ。
 競ぶる方もみたまへ。粧ひ言詰り後まじ。正光は。是不見惚て。か
 鹿女も世間。ありのみやと心裡。疑ひ。か。まを思ひ。頓て女子等
 流柔と出。菓子など進み来り。頓て吸物酒散。かひく。持運ぶ。兼
 て忍びの事なると。主従席と分つとあり。正光は上坐。お居るま
 られ。さる貴人とあやあや。彼女子共々さる。怯める氣勢もあ。は
 常の客と令釈。酌み。酒と次。鮮る。も。猶愛。正光は。不
 更ふ。の。と。強て。酒と。鮮る。も。猶愛。正光は。不
 至つて。あやなく。興あ。と。思ひ。日。の。背。何。知。や。頓。散。て。勢。ひ。着
 らの女子共と對面。あ。不。一。瞬。と。催。し。入。當。下。か。わ。て。促。し。あ。き。け。ん。一。人。の
 手弱女が。あ。の。物。と。提。て。徐。と。出。来。り。ま。づ。其。座。中。へ。後。と。做。と。正。光
 こそ。と。視。り。あ。ふ。始。め。より。一。て。ら。あ。居。る。女。子。共。の。猶。さ。り。倍。さ。る。幸。の。頃。は
 二十才。その。傍。の。艶。麗。さ。か。の。白。玉。小。白。ひ。と。食。ま。し。花。小。錦。の。紅。葉
 と。折。副。さ。り。と。斯。さ。り。の。業。の。あ。じ。と。思。ふ。ま。と。その。美。さ。え。も。い。え



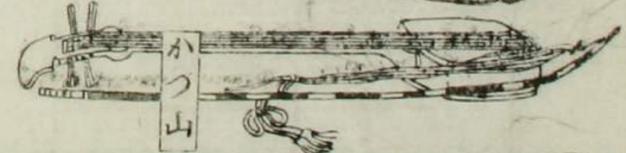
どぶ六

〇六

勝山を
愛居



大江樓
正光



かつ山

身と他の国へ活らるる時不及びても。父が記念する人小世小世稀なるものるれ。
身小副て難つとなく。背忍ぶの折る。把かしてさきと弾き。亡父小遭ふ心地
して。或ひ慰むときあり。また哀しむ時あり。不覚小心と遣うが
其音色の異なるなり。却て人小愛らまつ。彼処へ振うさく人召されて。
結句世後る便術とあるも。是を又の賜りのと。いと嬉しく有難く。あつて
大事小指さる。彼ふ少くゆふ。物うのあつねと弓のさき。物とありて
鼓ふより。漫小鼓弓と弓しり。是また又の言のき。是高せと一出す哉。
正光のふ小撒て。うらか下視のふ。其さる琵琶の愛新ありて。桂と縁の
四筋あり。まよ木と撓てられ如く。馬の尾とありて強とあせと。斜小持て
縁と摺き。その音凄く切るとして。願ふ悲哀と催すのこ。その餘の興

あつたのありねど。是と世小あき餘春あり。まよ木と鼓てせよとの命小あり
て勝山。かの鼓弓と丸右小持て。妻さうらう小一余所ありて。ありありのこ
花房。不のう小いんて。人小あつて。いと古家とゆふと鼓弓とを音ね小怒
むか如く。新う小似て何とあり。社々深心地ある小。勝山折と正光と視
あげぬ。眼小十分の情と合え。今朗誦小謡ひ。心ありてのあそこの。そね
どるさ小おわり。然らぬ。不始あり。愛むひ。勝山。妙のさ。これ容るれ。正光
のり。心惑ひて。更小前後も忘るるなり。現心もあつて。不得小長き春の
月も。や黄昏ふちうのさぬ。井六園内と始う。あつて興小の相の。遠遠近小
あつて。難小遠慮も清の。時ゆとひ。さき人忘る。願て速々小銀燭。山
の端。あつて。月と賀。價千金のつまも。俵ぬ。色とさめ。たて。又。亥の刻小

近づく。その時、因内は正光の傍へ進み、依指申す。又、山飯破と假するべき
 時刻ありありと。元より密の山忍び歩みの強時刻小物らぐぐは、衣具
 竭せぬと。今暫く山花興つと。若くは、加旗人、あつたふ若
 勝ふと。二のさの愛の山色あり。猶然らん、あは、彼女子の情と。と、驚き
 仰ぐ。かの洋小喻え。黄金と以て、病と賣へ、浮う者あり。如何も
 此方の隨之と。若今宵、山深間の伽ふ召さんと。あ、その正成言さば
 頼、密に付らん。山心、重く、真へうと。密に、かれば、正光の、渡り、舟の心地して。
 汝達、自然、あせり。吾、何と、か、の、妹、女と。ふ、ふ、の、ま、ま、歎、き、あり。よく、討、ら、よ、と
 のと、因内、の、畏、下、へ、ま、ま、太江樓の、主、お、詰、る、ふ、主、も、異、様、多、く、張、ひ、の
 す、と、頼、り、を、の、典、身、残、と、贖、ひ、ひ、て、山、館、へ、召、連、の、渠、も、焼、俵、ま、と

下僕等も大慶と、言を仔細に、他、ま、今、お、任、り、て、一、夜、慰、め、ま、を、奉、お
 り、て、金、く、抱、女、と、差、ふ、と、ま、渠、心、の、頼、ひ、ふ、度、ま、否、の、不、由、因、里、か
 ら、ま、ま、山、飯、へ、伴、ひ、つ、り、て、側、室、と、も、倣、り、ら、び、大、幸、ま、ふ、此、う、多、く、争、違
 背、と、仕、つ、ん、と、り、の、因、内、を、哀、願、て、い、ふ、ふ、ま、ま、理、あり、望、の、如、く、才、ら、ん
 依、典、才、銀、何、程、と、問、ふ、主、も、考、て、渠、が、才、も、種、の、眼、も、も、ん、え、さ、る、八、月
 挂、て、ま、ま、何、斗、の、務、も、要、せ、ば、二、百、金、と、賜、り、れ、と、は、て、因、内、へ、異、議、多、く、背、ひ
 井、を、思、ふ、不、似、ぬ、下、直、り、然、る、が、今、日、い、ま、依、初、の、野、花、び、あ、て、さ、る、大
 金、持、合、さ、ば、後、刻、飯、破、の、時、及、び、か、の、妹、女、と、伴、ひ、お、う、ん、お、汝、も、俱、小、属、て
 来、よ、然、ま、ま、頼、ふ、の、黄、金、と、遮、す、べ、と、約、束、あ、つ、依、井、六、も、を、の、り
 借、り、ま、ま、主、君、へ、今、宵、速、さ、ま、山、飯、伴、ひ、若、く、ま、ま、主、方、い、ま、程、小、斗、ら、ひ

心小飽まねば。何とぞ眼覚すき。遊びと傲して我も慰む。刀柄とも慰め
 糸くせん。と彼井六多小譚らみふ。今も生の中句あて四方の山を霞と
 折あり自ふされ繞く。桜海棠山吹の花を物う。諸木も花の紐とく
 春の山との控鏡小傍となく。就中嵐は山も俱小備とて世の文人
 墨客も。思ひ捨ざる名所あり。あふ若とあふく。色相。その日の景勢を。
 箇様く小あすまふ。餘所あさく。あさく。結構人の目とさ。後。此方
 小もま。興深くらん。あ後と刀柄初めあげて。近き小備。夕と火。勝山
 けてまこを。上もあさく。あさく。君あ。宴やべ。疾。準備と急。し。又。
 と渠等が。執向小徒。ひ。預て正光。小如。此。こと。初め。あ。れ。正光。は。ま。全快の
 出仕。せぬ。小。人。立。多。き。山。と。小。あ。り。人の耳目と。後。さ。く。あ。れ。あ。んと。沈。吟。し。て

決一のぬその容。勝山猶も。勝まり。傍て。君。天下の。三。臈。小。評。定。礼の上
 小在。了。よ。や。脚。を。踏。む。自。の。あ。り。と。も。惟。小。終。り。ん。殊。小。先。頃。は。所。様。より。
 保。表。の。は。ぬ。い。怪。り。ま。う。野。花。び。な。ど。あ。る。と。あ。の。山。沙。汰。も。あ。り。と。あ。ま。ま。に
 遅。く。し。の。ふ。べ。き。ゆ。や。い。あ。らん。一。騎。君。の。偏。り。と。屋。一。つ。心。を。さ。い。寒。や。病。も
 出。る。や。ん。疾。は。備。り。あ。ま。う。と。初。む。ま。切。る。小。正。光。の。始。り。否。あ。い。あ。ぬ
 花。の。の。宴。ま。い。と。人。の。い。小。任。せ。夜。の。嵐。も。僕。身。影。小。影。見。急。を。か。て。こ。と
 善。と。と。夫。より。准。備。と。邊。し。け。り

第四回 嵐の山の花見時 伊人時と笑顔の緒

再説その目小。あま。山。の。林。簾。より。甲。賀。の。定。致。着。る。幕。幾。許。と。く

あまの中央の正光が。座すとかびく紺色の。假子とて天と霞ひ。四方ハ
都て古金襴也。まて蜀江の綿也。赤地小黄金の光と映下。想相明
なるり。幕らち也。景勢ハ秦の始皇の故事也。漢天子と扱
て。驕奢と極めし傳えふ也。いまさう結構美麗。俗人膏と舖个
少く人耳と歌て。驚き歎むるなり。既ふその日の己の刻以甲寅正光ハ
乘輿也。徐々入事也。跡小引副法乗物ハ。その教養件といふと知
らぬ。遥の北方下うて。美光ハ十三の。女の童二仍小列なり。次ハ十七
ハの侍女也。今日と晴とを著装する。小袖の模振さまく小華美と
盡せ。振袖也。次ハ後山との次ハ。中福中居ハ茶の同婢女。立あらび
る。乃装ハ。芳野龍田の花紅糸と。一時小侍て従ふとも。あまの

トと云われう。かて倫と遊きて。彼中央の錦の帳と。装て次才不進
に入る。當下井六内等ハ。準備の唐櫃十掉をり。足程不昇擔つせ外
面のかえ下させて。封や切ひき内より把如を除味佳般幕のうら
差のりれ。侍女共々心めて。左右不立ハ。成菓と。前ちく。並ぶ。
唐山人も大諸侯の。富貴と稱して。侍女百人。食前方丈といひさうけん
まの肩あぐ。衆百品とも限らなき。器ハ和漢の東西ハ。さらり
速き。蠶夷の名器ども。服も及ぬまを連ねて。瓦礫不等しく。装
倣也。実ハ石崇が富ののう。玄宗貴妃と戯る。後宮のさても悲
像ら。まより酒宴始まりて。や。酢及比井六。豫て催しおきさる。白拍
子十五六人。古仕がりの。祭ありと。水干小笠。烏帽子。大刀と。玄て中



かろ山

正光
嵐山の
花の宴



まさ光

河花言二編卷之二

の十三

河花言二編卷之二

の十三

風流ありと。懐てぞいひる虚言。あひの外なる救者ども。らの鉄巻にて
 食ひぬらち。首と拘へて。無法の言とぞ敢て。あひの酒乳とび
 帯て居る。縛あわりと。勝とる。壯者ども。興あるとふ。あひて陸離とま
 向ひ。捻倒えんと。轉ゆけ。悔を思ひけん。携え来り。櫻か枝も。
 飽も其ぬらち。抛て。大に広げ。傷あるものと。取て。投り。捻倒へ。
 瞬間。五六人。支え。中心。刺着らる。と。嘈と。言る。吾縛ゆんと
 り。あひの。から。強き。錦帳の。裡ある。絲竹の。音。え。乳。と。譬。ば。烈。と。き
 夜嵐。え。果ぬ。髪と。破ら。ま。心。惑ひ。不興。醒て。ま。其。外面と。窺ふ
 り。當下。甲斐。彈。正左。衛門。正光。の。坐。成。ま。井。六。國。内。と。前。後。不。從。へ。
 錦の。帳。と。寒。つ。あ。の。景。勢。と。除。と。え。心。中。大。不。感。傲。いと。健。ある

武士。る。人。並。超。る。面。魂。か。る。者。と。折。ふ。と。物。の。要。あ。い。は。け。は。懐。け。か。え
 と。声。え。揚。あ。や。近。習。ど。の。背。く。法。ま。と。吾。武。士。の。い。え。と。て。近。習。を。忽
 地。不。用。きて。左。右。不。踏。蹴。せり。正光。再。び。声。を。あ。げ。飽。の。酒。の。喝。を。吾。不。意
 て。二。献。と。乞。んと。する。風。流。と。あ。う。と。骨。の。侍。も。妨。あ。せ。い。鳥。餅。な。れ。非
 常。と。懺。む。これ。も。赤。心。无。神。の。許。怒。と。収。め。此。方。へ。ま。と。を。その。ど。く。
 吾。齋。一。言。酒。一。盞。ま。未。時。の。い。と。彼。大。漢。士。の。忽。地。不。意。生。不。意。と
 頼。着。酒。狂。の。餘。貴。人。の。由。所。近。く。を。呼。び。其。罪。之。も。辨。れ。て。
 美酒。燭。え。い。實。仁。大。度。実。も。上。る。ま。良。わ。る。を。今。不。從。の。と。腹。を
 色。も。く。小。腰。成。屈。め。ゆ。と。近。づ。け。正光。え。の。座。不。後。井。六。と。い。その
 武士。と。錦。の。帳。の。裡。へ。入。と。前。不。居。る。大。盞。あ。い。蜂。竜。の。盞。と。く。吞。とい。ひ

酌といふ縁故あるを不負ふ富家子に重畳あれど。汝が奉初
尋常なれば。その健気な夜をられて。あの重畳と賜ふの有り。そは侍女
元の武士の幼くして進らせよ。と井六のいふ。彼武士の裁き居るの
在下と。か愛らして重畳とある。は蓋と賜ふと。猶よてもるれ冥加有り。
然るに命不随ひまつて。蓋桶の言さん。といひつゝあまふし出せば。侍女
二個左右より。鈍子を把て酒と次々。押す。正光の叔父。かの堅田の館
ふりりて。先年七び一甲斐三郎。時氏常不秘蔵して。身許を離るる西
よりしが。その滅亡の時。及び分捕あてらふ在り。這ハ誰人の送る所。その
起源と。知る事と。いと。洗ひ朱少く。蜂と竜とを。時給り。方を精巧。
世に属する物あまは。正光もま。秘蔵せり。後世の畧遺。在り。かの

栲次と地黄坊が。酒戦の長不用あり。或ひ三升入といひ。ま。二升入
といふ。あの大盃小盃まで。次々酒小行くと。栲の椽敷といひ。比良の岩
の春風不琵琶湖と。膝望心地一つ。ま。墨水の月の夜。塘の花の流る
似たり。かてその武士の宴時。猶縁とありしが。忽地一勢不吞干。舌お
傲して下小酌き。井しくと飲ひ。主君の指揮不侍女等。折敷不裁する
取散三種四種と。居まは。忝と。残る。うち食ふさな。い。え。ま。ま。
漢林之れ昔禁冷。が。豕の肉と。切製。今。その景勢不。彷彿されば。
正光不。興入。客入。実不。事あり。今。一蓋と。塗ら。ま。ま。ま。
いひて。ま。一杯。始め。の。飲干。居並。局中。薦達。の。正。不。果。
鬼。人。と。疑。ふ。り。孩。き。の。者。も。り。當。下。例。の。勝。山。を。



君の傍に在けり。送ふことどうも思ひ申す。とあるぬ客に在けるぞ。何ぞひ
 けん衝と立て。かの武士の傍へおき。踊りや見よ。何方と漂泊をひて。い
 ろうとあて来陣へい。何時来るか。いと問ひ鬼ら。かの武士の頭と奉て侍
 祝の傍へおき。勝山さう是いま。おひげるは再會のとき。かゝる出世の扱
 狸小。狂惑ささす。ものおあずる愛おん。現ともささす。の行装。不審
 さよと詰め。勝山の微笑。然もあまの理。是あは少一教あて。今い
 ある君お思ひ。物さしともあつた。おなほ。全く又上。教へり。ひ一鼓
 の徳。とさうあて。合長も。血脈の縁のあま。と。お再び遭ふ。と。献
 ぎ。さし亡。祝ふ面。と。合と。心地を。すれど。今。席あて。おん身。の。吾。侍。の。人。を。も
 結ぶ。お申す。君。小。頼。ひ。く。實。と。と。近。き。日。小。遭。ふ。せん。何。方。小。合。さ。う。さ。う。小。や

と。同。人。の。此。方。の。面。あ。げ。小。汝。も。知。る。と。今。小。於。て。一。所。不。住。の。流。浪。の。身
 頃。磨。小。ぬ。ら。む。螢。の。見。小。あ。ぬ。り。の。宿。も。定。め。て。甲。斐。の。彼。い。れ。う
 知。さ。う。近。き。小。仕。て。遭。ん。の。と。の。同。春。と。正。光。と。耳。に。立。て。笑。さ。う。が
 の。時。声。を。と。り。揚。げ。其。武。士。の。汝。が。兄。と。や。元。来。一。所。不。住。と。き。け。ば。定。ま。り
 方。主。君。も。な。く。櫃。小。収。め。て。曲。玉。成。價。小。う。り。て。活。ん。と。せ。る。ゆ。や。り。然
 らん。ぬ。い。今。う。り。て。吾。家。隸。と。な。り。ん。や。笥。の。働。面。魂。九。者。と。し。と。憑。敷
 思。ひ。小。勝。山。が。兄。と。ん。と。思。ひ。さ。や。あ。の。名。い。何。子。姓。名。と。何。と。の。い。と
 宜。く。か。の。武。士。の。救。面。額。着。養。へ。言。と。申。す。在。下。の。大。和。の。五。五。余。の。辺。の。産。と。い。て
 太。藪。草。藤。太。と。呼。ぶ。の。の。り。幼。稚。う。り。て。武。藝。と。好。む。所。と。遍。歴。さ。せ
 折。る。時。疫。ふ。く。や。父。母。も。續。て。辞。世。入。る。妹。勝。山。も。故。郷。小。居。ら。ん。實。小

浦島が子なれど。いふ小政とて家もさへ人おれねば只貴小。歎くもの。佳方は
 然らば是よりまき再び修行ふて傷ふ。妹が行方も尋ねんと申す。四国山陰山
 陽所と申吟迹の月をたれ洛の登りく。妹が行方更ふまは。いとを
 ちもあつた。湯を再命加梅あつた。富貴の才となほ。全く君の編
 のあて。結する所もいと。在下とて不才の身も。猶捨られぬ家臣の業
 算まふらんとの。厚き所は。使はもま。後とてなかり。忝なり。若然らん同胞が
 須弥山よりも猶さき。思ふのふ身と碎きても。大馬の労と場と。と放然と
 して回答けま。正光大お歎びて。頼の領掌満足なり。此方へ来と主従の約と堅
 めのの蓋。其へとありけま。葦太の結と傷。との蓋と敷くと。正光左右
 と願て井六園内も。あつた。の葦太と今より。汝も。あつた。と

親しとち。結らひ。隔り交り。と。今ふ。西個の額着々。むう。頼光の
 足柄あて。朧股の臣下と。えゆ。今。今。君嵐の山。良弼の臣と。得らん先
 蹤と。り。旁。以て。万。事。吉。兆。の。上。さ。愛。ま。よ。と。傍。痛。く。彼。と。壽。き。是。以
 後。を。阿。倍。論。諛。の。小。人。と。も。あ。の。正。光。り。と。あ。の。あ。の。小。放。て。相。互。ふ。知。る。中
 と。の。ひ。あ。う。う。偏。小。争。の。葦。太。小。辛。き。同。小。又。遭。す。の。の。あ。り。後。月。送。恨。の。せ
 ゐ。ふ。汝。等。彼。等。伴。ひ。の。さ。あ。の。さ。昔。と。和。睦。の。二。秋。半。ら。ひ。て。よ。の。命。と。ら。の。畏
 ら。ぬ。と。兩。人。と。葦。太。と。結。ひ。て。次。あ。る。近。習。の。幕。小。入。り。如。此。と。の。う。傳。え。ら
 和。睦。の。蓋。と。り。交。え。ん。同。列。近。習。の。老。者。り。嫉。ら。い。多。く。主。の。命。今。さ。う。辞。ま。さ。う
 の。の。心。目。が。金。二。容。小。毛。と。祝。し。且。後。来。の。交。り。成。互。小。契。と。契。ら。ま。ら。の。妻。時。の
 せ。ふ。酒。嗜。る。ん。勝。山。の。終。て。久。し。き。見。よ。再。命。す。の。の。さ。あ。の。忽。地。君。の。心。小。恨。ひ

て。近習きんじゆの列ち不お忍もびまうく。心こころ十二じふに分のぶ飲のびわるて。儀ぎ一いつ由ゆと厚あつく儀一いつ猶なほ破やぶ破やぶとま五ごつ居ゐつ。ままは女にふらち交ます。一いつ舞まてああの席せきの興きやうとまををく副らずとま正ま光ひかりとまななく飲びて。今日けふの飲の會かいああしふ。ままははるるままととれれもも魂たまゆゆ。空そらふあるるままは喜き悦えつの顔かほ勝か山やまの猶なほ多おほく。形かたち才さいと盡つく媚と献けんだ。かかままは其その日ひも黄わう昏こん小こ起おむさぬまとと今いま々々。名な残のこの惜あはれけと。言こといいふふ不ふ圖とままととて飯い破やぶと促うかかひひらら。儀ぎも葦あし太たくまととりりて。園のち内うち并ならびあららとといいととも。奥おくの出入しゆつええはは許ゆるされぬまとと。日ひ毎まい小こ君きみの傍そば小こ居ゐる。専せんららととの核こ子こ恨うらみんとと。姫ひめ酒さけ放はな落おつたりり。遺いつたかかとと。初はつむむとと小こ正ま光ひかりのかほ面おも白しろききととふふ。酒さけ色いろ不ふ耽たんとくく樂たのししくく。

忠勇阿伏倉日記第二編卷之二 終

